

第2回資源管理方針に関する検討会 (スルメイカ全系群)

1. 日程 令和3年 12 月 20 日(月) 10:00～15:30

2. 場所 AP 市ヶ谷 会議室 A

3. 出席者

水産庁：高瀬審議官、坂本管理調整課長、魚谷資源管理推進室長、晝間管理調整課補佐、藤原同補佐、上田漁場資源課補佐ほか

水研機構：西田水産資源研究センター浮魚資源部長、大島副部長、久保田 G 長ほか

このほか漁業者、漁業者団体、研究者、行政官、報道関係等、ウェブからの参加者を含め計約 80 名

4. 概要

(1)冒頭、高瀬審議官より、主催者挨拶。

(2)水研機構より、資料5『スルメイカ冬季発生系群資源評価更新結果』及び資料6『スルメイカ秋季発生系群資源評価更新結果』を用いて、資源評価の更新結果及び水産庁から依頼を受けて行った検討の更新結果について説明。

【主な議論】

- 3種類の評価結果。これまで、他の魚種でも基準シナリオを基本に検討してきた。今回、基準シナリオではダメなのか、なぜ代替のやり方を検討したのかを説明していただきたい。
- 現場からの観点で質問。13～14年前から、秋季の産卵場所は変わっていない前提での評価。水温が上昇して、7～8年前くらいから、対馬周辺で産卵のいかは獲れていないし、五島にも入らない。変わらず産卵していると考えているのか。
- 産卵場所は北上していると思っている。石川で5月くらいから獲れている。水研は資源の多い時の資料で説明しているのではないかと。低水温が対馬まで下がってくると、いかが獲れるようになる。その量を確保できるように管理するのがいいのではないかと。このままでは沖底も、中いかも、小いかも漁業者がいなくなってしまう。いか資源がなくなれば、他の魚もいなくなる、貴重な資源である。日本海の中国船は 4,000 隻もあり、乱獲していることを踏まえて評価しているのか。水温が上昇して、韓国側から降りてくる。中国と一緒に資源管理しようと言っているのか。対馬海峡でいかの産卵を多くさせれば、いかが回復して我々の生活が豊かになるのでは。まぐろのように国際会議に人を集めて、管理をして欲しい。以前から評価してきたとおりになっていない。水産庁にも、資源管理をして欲しい。いかがいなくなり、魚も減少する。真剣にやってほしい。
- いか釣り漁業者が豊かに生活できるようによろしくお願いいたします。
- 秋季と冬季の評価、さっぱり意味は分からない。研究機関が色々やっていることは分かるが、我々沿岸の漁業者が実際操業していると、19 年、20 年、日本海、北海道で操業して、何とか生活してきた。21 年は、春の日本海沿岸だめ、太平洋に戻っ

てきても全くというほど漁獲が少ない。獲れないため値段がいいだけで、小型いか釣りは、今も日本全国でダメ。水温が高い影響。六ヶ所村あたりからのマイワシの大量死亡。マイワシ、サバの時期が全くずれている。もう少し地域の現状を踏まえて、来年の TAC の予測をしてもらわないと。効率のよい漁法もあるが、釣りは専獲なので考慮してもらわないと。アメリカ・カナダは一つの国だから予測できるだろうが、日本海では中国や北朝鮮も漁獲している。沿岸の漁業者が少しでも潤うような資源管理をお願いしたい。

- 前回も意見したが、産卵場が北上しているのが漁業者の実感で、研究所の調査だけで評価しているのでは。獲り残し一定、3ヶ年固定等のシナリオを採用しても、中国がその獲り残し分を獲ってしまうのではないか、中国が守らないのに意味があるのか。11 月に小樽で小さいかが獲れる。これはいつ産まれたのか。昔の知見で評価していて、前回から進展していないのでは。漁獲シナリオ以前の問題があるのでは。
- いか釣り漁業は、効率が悪いので、資源が回復して、漁獲が増えないと成立しない。資料6秋季系群の P.14 を見ると、3か年一定方策だと、将来の漁獲量が低く見える。資源管理で我慢したら、漁獲が良くなっていくということでない資源管理に取り組む気が起きない。

(3)水産庁より、資料7『漁獲シナリオの検討について(案)』を用いて、漁獲シナリオの案について説明。

【主な議論】

- 説明を聞いて去年のことを思い出した。中国も考慮して6万トンが 18 万トンになった。基準シナリオで過去やってきて、このように大きく変動することはなかった。その上で3か年固定というのが腑に落ちない。同じことは起こらないのでは。3か年固定で行くと、漁獲が増えないのも困るし、中国が違法操業をすればシナリオが破綻することをどう考えるか。
- 3つのシナリオのどれを採用するかは重要なので、ウェブ参加の人も含めて広く意見をもらって決めてもらえればと思う。

(4)水研機構、水産庁からの説明を踏まえ、総合討論を行った。

- 大きな要望が1つ。スルメイカの資源調査と評価をもっとしっかりやってほしい。日本海について、調査船等を使ってやってほしい。例えば、秋生まれと冬生まれの2つの系群について、本当にそうかと思っている。今の資源の状況に合っているのか。
- TAC 管理について、意見が4つ。スルメイカの資源がよくわからない中で、漁業者としては、たくさんイカが来たらどうするのか。獲り方に応じて、フレキシブルな形をとれないかと思う。3年固定は反対。理屈もスッキリしないし、実行上も窮屈。他の魚と違って単年性のスルメイカは難しい。配分について、定置分に 15%の留保はどうなのか。従来の考え方であれば、都道府県の配分の中で確保すべきでないか。
- 2点質問。スルメイカ、TAC 導入から 23 年間。都道府県について、スルメイカが数量明示で管理した例はない。今回、数量明示になる都道府県がどこになるか。またその TAC 配分量の規模感は。

- 北海道は一昨年5千トンを上回る漁獲だった。過去に1ヶ月で5千トン獲れたことが11回、1万トン超えも6回。定置網の特性上、想定外の来遊もあり、管理に困難生じる。大臣管理区分に迷惑かけることないように、十分な留保枠は欠かせない。
- 全国の漁獲の8割上位が、数量明示ということは、事務方は認識。現場の漁業者は自らのこととして認識していない。来年度から数量明示となれば、現場の漁業者は混乱に陥る。理解を得るため、国から丁寧な説明をお願いしたい。クロマグロに関しては、大量入網により、大変な苦勞をした。安心して操業するためには、留保枠の十分な確保について配慮してほしい。3年固定について、現場の漁業者としては、計画的に操業できるようにということで複数年管理は希望してきたところだが、資源が回復してきた場合には柔軟な対応をお願いしたい。北海道ではスケトウダラで色々配慮してもらったが、資源状況に応じた TAC 管理をお願いしたい。
- 質問はしたが、どのシナリオがいいかは皆さんの意見も聞きたい。3年固定だと、漁獲量が増えないのは望ましくない考える。
- ベータの数字に関連して、リスク評価でランク1とランク2がある。追加的なリスク評価について、2%を下回らなければならないのか、1%が良くて、3%が悪くて。科学的に理解ができない。1%のリスクなら、99%は OK だからよいのではないか。
- 保守的に行くべきか、経済を回すべきか、そういうことですな。
- 0%と2%といった小さい数字で、このリスクを下回るという話をしている。これも単なる線引きということか。
- TAC は低い方がいいが、せっかく研究所の方々から提案がでてきたものであり、3か年固定でやってみて、極端にいかが増えるようなことがあれば、3年以内でも見直すことでよいのではないか。
- 3年固定の話、色々意見あると思うが、我々として納得するために、理解しなければならない。私もわからないし、漁業者も理解が進まない中で、水産庁はどこかで線を引かないと、と進めようとしている。漁業者が納得してからやらないと管理できない。そもそもの問題として、スルメイカは中国や北朝鮮の IUU が暗い影を落としていて、これに対しての明確な評価や対策が無い中で、TAC が3倍になって、何がどう変わったのか、これまでの TAC 管理は何だったのか。過去は中国の漁獲量を入れない TAC で、違反したら罰せられる前提で守ってきた。実は漁獲が倍以上ある中で、意味があったのか。それに対する再評価は聞いたことがない。今回は 15 万トンの漁獲を入れて、3倍の資源量がある前提で管理をすることになるが、中国の 15 万トンが続く前提なのか、ゼロになる前提なのか。前提条件が変わっていることの説明が届いていない。リスク評価の線引きについては、中国の IUU 漁獲量の話との関係はどうか。TAC は安定して欲しいが、なぜそうなるかという、いかは単年魚であって、変動するときに、管理で固定していいのか。経済を配慮しているのか。その辺も疑問がある。この場でなくてもいいがしっかり説明をして欲しい。
- 漁獲量が減ることになる。IQ を実施するよう水産庁から言われており、検討している。漁獲量を IQ に分解した時に、経営が成り立たなければ納得得られない。中国の違法漁獲がある中で、TAC を減らされて、産業として成り立たない。漁獲量を十分に確保できるよう、配慮が必要。

- 留保の考え方は、管理区分の間で、漁獲が変動するので、関係する漁業者がそれぞれ拠出している形となっている。もし特定の区分でしか使えないようにするなら、使う区分から拠出すべきである。
- 初めての数量管理ということで、不安を抱えている。決して定置専用に確保とお願いしている訳でなく、十分な数量を確保してほしいというお願いである。都道府県分のみで確保するとなれば、十分な数量確保できず、かえって大臣管理区分にご迷惑をおかけすることも想定される。

(5) 会合中に出された意見を踏まえ、水産庁が以下のとおりとりまとめを行い、改めて提案を行った。

- 中国の漁獲(評価上の仮定値で 15 万トン)は、これを追認しないということで、TAC の設定・配分に考慮しないことに特段の異論はなかった。
- TAC を設定する際の根拠となる ABC は、秋季と冬季の発生系群の合計値とすることに特段の異論はなかった。
- 違法でない韓国、ロシア、中国(太平洋側)の漁獲を考慮するため、過去実績で我が国が最大の割合を有していた 2007 年の6割を用いて我が国に配分することについても、特段の異論がなかった。
- シナリオについて、意見が分かれている。3年固定とする意見と、基準シナリオを支持する意見があった。水産庁としては、当面の管理の安定性が重要だという観点から、3年固定を引き続き提案したい。仮に3年固定を採択している場合に、資源の状況が想定外に良くなる場合には、3年以内であっても SH 会合を開催して議論する中で見直しをする可能性も排除しない形での、3年固定にしたいという考えである。少なくとも3年後には見直しをして、引き続き3年固定にするのか、基準シナリオにするのかといったことを検討する。
- リスクの取り方について、リスク2でなくリスク1でよいのではないかとの意見もあったが、リスクが基準シナリオより増えないランク2を採用することを提案したい。
- 留保について必要性に疑問は呈されなかったが、全ての区分から拠出するのに、使える区分が限定することに疑問が呈された。現状の資源、留保をとる際に、細かい話をすれば、「現行水準」による配分になっている都道府県からも留保から拠出している。そういう意味では、留保を拠出しているが、配分の対象となっていない例もあることは指摘したい。一方で、留保をとられるだけとられるが配分の対象とならないのがおかしいという意見は理解するので、資源管理基本方針上、配分の対象を定置漁業に限定するのではなく、誰でも使える位置づけとしたい。一方で、定置への大量入網の重要性は変わらないし、急激な漁獲の積み上げりの実績があるとことだったので、浮魚類の 75%ルールと同じようなルールを作って、水政審には事後報告で対応できるようなルールを定めて迅速に配分できるようにしたい。一方で、他の大臣管理分については、水政審への諮問を経て、必要に応じて配分する、とやり方で、区分に応じて差を付けさせてもらえれば。留保の数字 15%の数字で提案しているが、留保の使い方も踏まえ、必要最小限にすべきと認識。留保の取り方(15%)については、引き続き関係者の意見を聞きながら、必要最小限にとどめることで固めて行き

たい。

【主な議論】

- 留保に関して2つ質問。全ての漁業種類に配分しようとのことだが、漁期が異なっていて、定置は一番最後に、入るか入らないか分からない。その後に余ってもいか釣りでは使いようがないのでもらっても使えない。IQ にした時に、追加配分の対象となるのか。他の資源では対象から外していると思うが。
- 昨年と同じような SH 会合の結論。ベースケースで何故だめなのか、全然説明がなかった。昨年、ベースケースで 18 万トンという数字が出た。今年の我が国の漁獲状況、業界ごとに凸凹あるが、かなり低い水準。これって一体何なのか。単年性のものを、漁獲量一定という考え方が、全く理解できない。今まさにスルメイカの資源が変わって、動いている。安定、安定というが、全く安定していない。このままシャンシャンで終わるのかも知れないが、自分は絶対納得しない。こんな SH 会合ならやらない方がいい。漁業者は理解できない。一方的な申し渡しとなっている。
- それじゃ間に合わない。そういう資源じゃないでしょ。いか資源に向き合って欲しい。いかを獲っている漁業者にも。科学に見せかけているが、根拠の無い数字と一緒に。自分は2年連続で同じことを言っている。何を言っても押し切るんだらうから、これ以上言わない。あほらしい。
- 会議になっていない。我々の意見を吸い上げていない。理解と納得が得られていない。TACを守るのは我々。大変なのは分かるが、去年も最後は藤田部長が、今年はこれでやってください、と言って終わってしまった。水産庁の意向に沿って終わらせようとしている。ちゃんとした説明がないので、漁業現場の納得が得られない。加工屋が困っていて、獲れるのに獲れずに困っている人達もいる。集めるだけ集めて、この結論では、現場に説明ができない。この会議は毎年やればいいではないか。資源がどうなっているか見直して議論すればよい。2年連続、ゴリ押しで水産庁のやり方で進められてしまったというのが感想。
- いかは単年魚。なぜ資源管理しないのか。まぐろのように国際的に管理しないのか、中国と話して10%でも20%でも資源管理してもらったら、生き残りが増える。1年魚なので、資源管理で増えてくる。それを分け合って、皆が助かる。
- 成果が見えて来ないと、生きていけない。相手は難しい国だが、日本のスルメイカを守るため、何とか頑張ってもらいたい。
- 水産庁主導で、説明も受けて、我々が従う。いか資源が全体に及ぶ中で、外国の問題が避けて通れない。外国問題のスピード感と、TAC設定の感じが合っていないので理解が得られないのでは。進んだことを示してもらわないと。
- 会議自体、結論ありきで、スルメイカの生態について、単年魚ということを踏まえて、しっかり議論してTAC設定して欲しい。6割を掛けることについて、ここ何年かはやっていなかったはずだが、これを戻す理由いかん。

(6) 以上の議論を踏まえ、水産庁が再度、以下のとおりとりまとめを行った。

- 水産庁からは3ヶ年固定を提案した。賛成もあったが反対もあって、水産庁が3年以

内に見直しの可能性も言及したが、それでも納得いかないとの意見があった。漁獲シナリオについては、水産庁で、両論があったということで引き取らせていただく。

- リスク評価の結果、ランク2のシナリオを採用することについては、同じく漁獲シナリオに関係してくる。
- 留保については、最小限にすることと、定置に限定でなく、定置に一定の配慮はするが、その他の漁業も利用可能と提示しているが、これについては理解を頂いたと理解している。

以上